

市史編纂たより

第3号

平成27年4月発行

摂津市総務部市史編さん室

〒566-0023 摂津市正雀4丁目9-25 摂津市民図書館内 TEL06-6319-0587

◎昭和時代の小学校給食



小学校給食の様子
(摂津小、昭和50年5月15日『広報せつっ』)

◆小学校給食のはじまり

皆さんの小学校給食の思い出はどのようなものでしょうか。一口に給食と言っても、現在の形式に至るまでには様々な変遷があります。皆さん自身が給食を食べていたとき、お子さんが給食を食べていたときなど、地域や世代の違いによって、きっと千差万別な「給食の思い出」があることでしょう。

摂津市域の小学校給食は、昭和23年(1948)頃、戦後の経済的困窮と食糧不足から児童を救済するための措置として始まりました。はじめはユニセフな

どの救援物資である脱脂粉乳を利用したミルク給食(ミルクのみの給食)が実施され、完全給食(パンまたは米飯、ミルク及びおかずで構成される給食)が始まったのは、三宅小学校が昭和31年、味生・鳥飼・味舌小学校は昭和37年のことでした(三宅小『三宅百年のあゆみ』、鳥飼小『90年の歩み』など)。昭和37年11月1日の『三島町報』には、町内の全小学校で完全給食を実施することができた喜びとともに、「児童の身体の向上、会食による精神的な効果、さらには地域社会の食生活の改善を図りたい」という考えが述べられています。

昭和30年代の給食の献立を現在のものと比較すると、当時は米飯給食が実施されていないため、全てパン・ミルクにおかずという取り合わせです。また、食品の分類はずっと大雑把なものでした。昭和29

昭和38年2月の献立(昭和38年2月1日『三島町報』)

日	献立名	主な食品名
1日、13日	やきそば	人参、青葱、きゃべつ、もやし、豚肉、竹輪、そば
4日、14日	関東煮	人参、大根、竹輪、赤棒天、厚揚げ、馬鈴薯、砂糖
5日、15日	カレーシチュー	人参、青豆、玉葱、鯨肉、馬鈴薯、マカロニ、小麦粉
6日、18日	スイートポテト カレースパゲッティ	さつまいも、黒胡麻、砂糖、人参、青葱、玉葱、豚肉、スパゲッティ
7月、19日	鯨肉甘辛煮 野菜サラダ	鯨肉、砂糖、人参、キャベツ、ソーセージ、馬鈴薯、マヨネーズ
8日、20日	味噌汁 野菜含煮	青葱、大根、豆腐、油揚げ、みそ、わかめ、馬鈴薯、人参
11日、22日	竹輪空揚げソテー	竹輪、人参、きゃべつ、もやし、豚肉
12日	ぜんざい・塩昆布 ごま和え	小豆、白玉粉、塩昆布、砂糖 白菜、白胡麻

(献立中にはパン・ミルクを含む)

平成27年3月の献立

(平成27年3月『学校給食だより』/摂津市学校給食会)

2 日 (月)	献立表	栄養三色(赤・緑・黄)食品名・可食量(g)				
		黄	赤	緑	黄	
2 日 (月)	さけちらし	黄 こめ	60	黄	しろごま	2
		赤 だしこんぶ	0.3	赤	かまぼこ	7
	ぎゅうにゅう	黄 さけ	1	赤	いなかがあげ	10
		黄 こめず	9.2	緑	たまねぎ	30
	すまじる	黄 さとう	3.3	緑	だいこん	20
		黄 しお	1.2	黄	じゃがいも	20
	てまきのり	赤 さけフレーク	25	緑	えのきだけ	10
		緑 さやいんげん	5	緑	みつば	5
		赤 たまご	20	黄	うすちししょうゆ	4
		黄 なたねあぶら	0.5	赤	けずりぶし	3
		黄 しお	少々	赤	やきのり	1袋
		熱量504kcal、蛋白質27.7g、脂肪16g、カルシウム316mg、鉄2.4mg、ビタミン(A 174μg・B1 0.33mg・B2 0.58mg・C 20mg)、食塩相当量2.7g、食物繊維3.1g				

年の学校給食法制定以降、我が国の食糧事情の変化や栄養学の進歩に合わせて、学校給食の平均所要栄養量と標準食品構成表は、数度にわたり改訂されています（標準食品構成表は昭和46年～）。たとえば、必要な栄養素として鉄が新たに加わったのは昭和60年、食物繊維は同63年で、さらに同年からはナトリウム（食塩）の量に制限が設けられました。食品構成についても、昭和60年まで魚介類・肉類・卵類は動物性食品として一括して扱われ、野菜類も緑黄色野菜・淡色野菜のような分類はありませんでした。

◆より充実した学校給食を目指して

学校給食法には、「適切な栄養の摂取による健康の保持増進を図ること」をはじめとする、学校給食実施における目標が定められています。しかし、給食には栄養価だけでなく、安全性や美味しさも求められることから、常にコストが問題になりました。急激に物価が上昇した昭和40年代後半から60年代にかけては、摂津市も5度給食費の改定を行っています。昭和49年（1974）に（月額）小学校低学年900円・高学年1,000円から、低学年1,500円・高学年1,600円に値上げした際には、パン・牛乳の価格高騰にとまない副食費が切り詰められていることを訴え、具体的な献立の例を挙げて保護者の意見を求めました。

2月第一週 実施献立	改訂後の予定献立
みそスープ、みかん	みそスープ、りんご1/2、ジャム
油あげ5g、じゃがいも30g、にんじん10g、白菜20g、豚肉5g、青ネギ5g、ちくわ10g、みそ10g、だしのもと1、みかん1ヶ	油あげ10g、じゃがいも30g、にんじん20g、白菜20g、豚肉10g、青ネギ5g、ちくわ20g、みそ10g、だしのもと1、ワカメ3g、りんご1/2、ジャム1ヶ
熱量612kcal、蛋白質22.6g、脂肪19.5g、カルシウム335mg、ビタミンA 779IU・B1 0.79mg・B2 0.75mg・C 56mg、価格28.3円	熱量721kcal、蛋白質25.8g、脂肪23.7g、カルシウム383mg、ビタミンA 906IU・B1 0.76mg・B2 0.75mg・C 25mg、価格50.4円

（昭和49年4月6日「給食費の値上げについて」/摂津市教育委員会・摂津市学校給食会）

保護者からは、主に「値上げはやむを得ない」「質を向上させてほしい」「公費による補助を増やしてほしい」といった意見が出されました。保護者の負担を軽減するため、市の公費負担も年々増額し、昭和50年には1食あたりの平均負担額が115円となり（保護者負担分は低学年88円、高学年94円）、「苦しい学校給食の実態」として市民に理解を求めています（昭和50年5月15日『広報せつつ』、同51年4月16日「摂津市学校給食対策審議会 中間報告」）。

また、昭和51年2月の学校給食法改正により、以後全国的に米飯給食の導入が推進されました。従来の給食室は、パン工場からパンを搬入することを前提としていたため、炊飯設備を新設する場合の負担は大きく、自校炊飯と委託炊飯、アルファ化米利用の比較検討が盛んに行われました。

大阪府下における米飯給食の導入は立ち遅れ、昭和54年度の実施学校数が全国平均76.1%であるのに対して大阪府は26.1%、同55年度は全国平均82.2%・大阪府33.3%です（昭和54年5月、同55年5月調「米飯給食実施状況」）。特に大阪北部では、池田市が年3回の特別献立（行事食）として実施しているのみでした（昭和54年度「米飯給食」/三島地区学校給食研究協議会）。

摂津市においては、昭和56年度から本格的な実施に向けた検討がはじまり、同58年3月に1度試験導入をしたのち、4月から月1回の米飯給食が始まりました。その後米飯給食の回数は徐々に増え、現在は週3回実施されています。（片山 早紀）



昭和58年3月17日の米飯給食試験導入
（柳田小、昭和58年6月15日『広報せつつ』）

◎鳥飼猿楽の登場

無形文化遺産の一つとして国際的にも認められた、日本を代表する古典芸能である「能楽」には600年を超える歴史があります。明治維新を迎えるまでは「猿楽」と呼ばれ、その中に鳥飼の地を拠点に活動していた「鳥飼猿楽」の存在がありました。ただ、現在の摂津市には、その活動を偲ばせるものは何も残されておらず、旧鳥飼下之村の小字名「上猿子田」(現鳥飼本町内。「さるがく→さるごう→さるこ」と音が転じたものか。)に、わずかにそのゆかりを感じさせるばかりです。

◆醍醐寺への出演

鳥飼猿楽が初めて史料の中に登場するのは、「夜宮、今年鳥飼猿楽云々。座主以下見物す」、「猿楽、夜前の如し」と記された応永2年(1395)4月17日と18日の『隆源僧正日記』(『醍醐寺新要録』所引)になります。京都の醍醐寺で座主(首席の僧)を含む人々が鳥飼猿楽を見物したとあります。この日記が書かれた頃は、猿楽が将軍など時の為政者をはじめとする人々から強く愛好されて流行しはじめた時期でした。当時は、著名な世阿弥の一座が属する大和猿楽に限らず、犬王道阿弥に代表される近江猿楽をはじめ、宇治猿楽、伊勢猿楽、丹波猿楽と近畿各地に猿楽座があり、しかも鳥飼を含む摂津国には榎並猿楽(現大阪市)や宿猿楽(現茨木市)もあり、加えて本座(京都)と新座(奈良)の田楽もありで、芸能の世界における群雄割拠の時代でした。

◆東寺との関係

このような背景の下で鳥飼猿楽が次に登場するのは、応永19年(1412)12月3日の『鎮守八幡宮 供僧評定引付』(以下の引用では『引付』と略。『東寺 百合文書』)です。そこには「猿楽鳥飼愛幸、当座の事を申す。この間、皆々水難のところ、近日諸方相語らい、一座を立て了んぬ。然らば鎮守に於いて宿願の子細候、よって御庭の借用を申すべき由、望み申し候」つまり「鳥飼猿楽の愛幸(大夫)が言うのには、こ



東寺境内での演能が許された

の間は水難に遭ったが、皆で話し合い、座を再興したので、(東寺の)境内で演能させてほしい」と願い出たところ、「庭借すべき由を衆儀し了んぬ」と、首尾よく許されたことが記されています。この後も鳥飼猿楽をめぐる記事は20本以上この『引付』(『摂津市史 史料編一』288～350ページ)に残されていますが、鳥飼の「水難」に触れているのは、この1カ所だけになります。冒頭に触れたように、現在、鳥飼猿楽の存在をうかがわせるものが何も残されていない理由の一つに「水難」があることを、端的に物語る史料といえます。

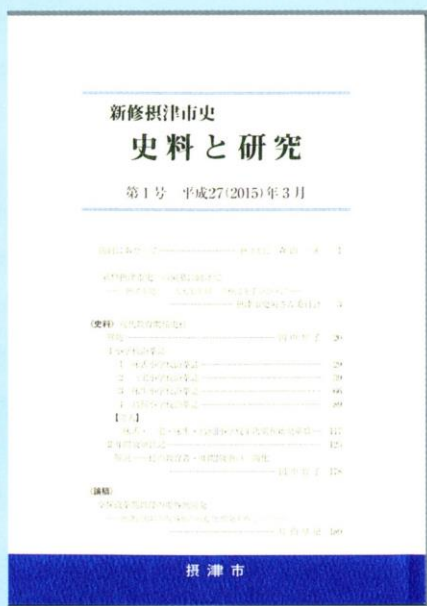
◆御香宮での上演など

次に見るのは、「御香宮に猿楽有り。摂津国の猿楽鳥養と云々」という、後花園天皇の父、伏見宮 貞成親王の日記『看聞御記』に登場する応永25年(1418)3月10日の記事です。これで、醍醐寺、東寺、御香宮と、京都の代表的な演戯空間への鳥飼猿楽の足跡が確認できました。御香宮では丹波猿楽の矢田猿楽が楽頭職(優先的出演権が認められた立場)を勤めており、鳥飼猿楽の出演は矢田猿楽に雇われての出勤でした。応永31年4月27日の『引付』には鳥飼猿楽に関して「猿楽愛幸、鎮守において法楽の事を所望申すの間、披露のところ近年連々望み申す上は、子細あるべからず。衆儀の分これ有り。よって禄物の事五百疋となすべきの由、治定せしめ了んぬ」との記事が見られ、「毎年望んでいる事なので、良いだろう。禄物は500疋とする」として演能が許されています。中世経済の研究者によると、銭1貫が今日の10~20万円と想定すれば、500疋はその半分の5~10万円に相当する額となります。なお、この後も、「禄物例の如く五百疋」という記事が複数見られ、通常500疋という報酬が、鳥飼猿楽の演能に際しては与えられていたようです。

このように、当時の鳥飼猿楽は華やかな京都を舞台に、活発な芸能活動を続けていたようです。(川上孝也)



伏見の御香宮でも演能された



『新修摂津市史 史料と研究』第1号 が刊行されました。

掲載内容

『新修摂津市史』の編纂に向けて
 《史料》◎近代教育関係史料
 (小学校沿革誌・井関敬順日記)
 《論稿》◎享保改革期以降の堤外地開発

A5版 212頁 販売価格 900円

販売場所

摂津市民図書館内 2階 市史編さん室
 TEL06-6319-0587 (平日 火~金曜 9~17時開室)